最近の動き

就任のご挨拶と放射線腫瘍学教室のご紹介
～放射線医学教室の改組を経て～

大阪医科大学　放射線腫瘍学教室　教授　　二瓶　圭二

令和元年8月16日付で大阪医科大学 放射線腫瘍学教室の教授に就任いたしました二瓶　圭二でございます。本誌の紙面をおかりして、大阪医科大学医師会の皆様にご挨拶申し上げます。

私は平成6年に京都大学を卒業し、日本赤十字社和歌山医療センターでの研修、京都大学大学院医学研究科腫瘍放射線科学での研究を経て、平成11年に千葉県の国立がん研究センター東病院に着任する機会を得ました。当初2年間で大学院に復学する予定でしたが、がんセンターの居心地がよく赴任期間がずるずると延長してしまい、結局今回の着任まで20年間を関東で過ごすことになりました。がんセンター時代は、臨床試験を通じて食道癌や肺癌などの集学的治療の開発に、また早期肺癌や前立腺癌に対する陽子線治療の初期臨床データの蓄積に従事しました。その後、平成23年にがん・感染症センター都立駒込病院に異動し、サイバーナイフやトモセラピーなどの高精度放射線治療専用装置の臨床導入、またIMRT（強度変調放射線治療）や定位放射線治療の普及、適応拡大に尽力しました。このたびご縁があって20年ぶりの関西での生活となりましたが、吹田市出身の私にとって北摂、三島は非常に馴染みのある地域であり、地域医療への貢献にますます意欲を高めているところです。

さて、皆様ご存知のように、この度の就任を機に放射線医学教室は腫瘍学教室と診断学教室に分岐することになりました。令和元年7月1日に着任された診断学教室の大須賀慶悟教授とともに、昨年度は放射線医学教室の発展的改組に取り組みました。腫瘍学と診断学はそれぞれ診療内容が異なり専門化、高度化しているため、両教室に分岐することは今後の発展には不可欠です。一方、これまでの長い歴史の中で育まれてきた同門会、関連病院との交流、また学生や若手医師の教育活動など、今後も両教室一丸となって取り組むべき活動もございます。今後は両教室で切磋琢磨しながらそれぞれ魅力ある教室づくりに努め、大阪医科大学医師会の皆さまに注目していただけるような活動を行って参りたいと存じます。

ここで、放射線腫瘍学教室について紹介させていただきます。放射線治療はがん治療の三本柱の一つとして、高齢化社会を背景にますますその重要性が増しています。患者数は年々増加し、2台のリニアック装置で年間900例以上の新規患者に治療を行っています。今後はがん拠点病院としていかに的確に高精度治療を提供できるかが課題です。また、本学の特色ある治療として、ホウ素中性子捕捉療法（BNCT; Boron Neutron Capture Therapy）がございます。本年6月1日より、切除不能局所進行又は局所再発頭頸部癌を対象として保険診療が開始されました。歴史の長い治療ですが、本格的な臨床導入という意味において新しいこれからの治療、promisingな治療といえます。研究面においても、ホウ素薬剤開発、FBPA-PET、線量分布改善など多くのシーズが潜在しており、大いに活用しなければなりません。各診療科との連携強化につとめ、臨床と研究の有機的な推進を目指すとともに、次世代を担う後進の育成や人員の拡充に取り組んで参ります。また、私個人としましては、4月1日付でBNCTセンター長、がん医療センター副センター長、緩和ケアセンター長を拝命いたしました。

これらの活動を通じてがん拠点病院としての責務を果たし、大阪医科大学の発展に貢献して参る所存です。

新年度を迎え、さあこれからという時にコロナ禍の時代に突入しました。一日も早く新しいライフスタイルを構築し、オンオフともにみなさまと密なコミュニケーションがとれる日を心待ちにしています。どうぞ今後とも一層のご支援、ご指導を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

放射線腫瘍科スタッフ

リニアック室にて